

日本の事例から今後の学生参画の在り方を考える

中里 祐紀（東京大学大学院）

国立情報学研究所の検索システム(CiNii Research)で、タイトルに「学生参画」というキーワードが含まれる論文を検索すると、ヒットする論文の初出は 1986 年である。これを踏まえると、「学生参画」は約 40 年の歴史を持つ用語である。日本の学生参画は、海外とは異なる独自の変遷を経験してきた。特に 2000 年代に岡山大学でスタートした「学生参画型 FD」、立命館大学でスタートした「学生 FD」の取組みは全国的な広がりを見せた。これらは日本独自の取組みと評価されることもある。

近年、質保証への学生参画に関する議論が行われ、学会誌で特集が組まれるケースもあるが、日本の学生参画に関する研究の蓄積は十分ではない。そのため、杉谷（2025）が「変わらぬ課題」と表現したように、理論及び実践上の重要課題が十分検証されることなく同じような議論が繰返されている側面がある。また、参画学生の視点に立った研究は非常に少なく、現在教職員や評価機関が望ましいと考える学生参画の在り方が、現在の日本の学生に支持されるのかという視点からの検討は十分ではない。

今回の発表では、主に次の 2 点について取上げる。第一は、1980 年代以降の日本の学生参画の変遷についてである。約 40 年の歴史を持つ「学生参画」と称する取組みがどのように展開され変遷してきたのかを整理した上で、今後の方向性について考える。第二は、学生参画をめぐる課題についてである。具体的には①学生参画の意義、②参画学生、③学生参画の効果、について取上げる予定である。

発表者は、学生時代に学生参画経験を有し、その後大学院で研究する中で、これまで多くの参画学生に出会い、インタビューしてきた。彼らの中には、学生参画経験を通して大学を好きになり、卒業後大学の教職員として活躍するケースも少なくない。一方、活動を通して傷ついた学生の存在や経験を見聞きすることもある。

学生参画は、通常高額な予算措置は必要ないが、参画する学生は学生時代の貴重な時間を使って活動する。学生参画を推進する教職員、評価で大学に対応を求めようとする評価機関は、「参画学生を不幸にしない」という強い覚悟をもって日本の学生参画の在り方を検討する必要がある。

【参考文献】

杉谷祐美子（2025）「学生参画に向けたアプローチの可能性」（日本高等教育学会第 28 回大会 課題研究 I 指定討論配付資料）

中里祐紀（2022）「学生参画型 FD の有効性と継続性—岡山大学を事例として—」『大学教育学会誌』44(1),140-149.

中里祐紀（2024）「日本の大学教育における学生参画の変遷と課題」『比較教育学研究』69,91-109.

中里祐紀（2025）「学生参画型教育改善活動における一般学生の参画—学生参画型 F D を事例として—」『大学経営政策研究』15, 93 - 107.